

〈1年生〉赤ちゃんだっこ体験

1 学習のテーマ

3年間のテーマ 発信・核・感謝
今年度のテーマ コミュニケーション

2 学習の目的

- (1) 命の重さを実感して、家族や周りの人への感謝の心をもつ。
- (2) 地域の方との関わりの中で態度・聞き方・話し方などのスキルを身につける。
- (3) 生徒達の手で計画を立て、実行していく力を育てる。
- (4) 発信する力を育てる。

3 今年度の活動に至る経緯

赤ちゃんだっこ体験は、夏休み前からプロジェクトが動き出した。動き出した当時はまだオータムプロジェクトが動き出していなかったため、内容は前年度踏襲型で、当日うまく運営するために教員が生徒に仕事を割り振り、教員が段取りを組んでという教師主導で始まった。しかし、オータムプロジェクト始動にあたり、「これでは生徒主体でもなんでもないのではないか」ということに気づき方向転換を図ることとなった。本レポートでは時系列で活動の流れを示していく。

月	活動内容
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 福井工業大学附属福井高等学校の先生に赤ちゃんだっこの講師依頼 ・ 広報係とおもちゃ係決め それぞれのリーダーを決めて活動を進めた。この段階でリーダーはいたが教員の指示がほとんどだった。 広報係 … 小学校と中学校の各家庭にチラシの配布。地域の保育園、公民館にポスターを貼ってもらい、チラシを置かせてもらう。情報誌にチラシを掲載することを決めた。 おもちゃ係… 美術科の授業でおもちゃを作ることに決まった。安全性などに配慮しながらどんなおもちゃにするか決め試作した。
8月(夏休み)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 情報誌担当の広報係は情報誌に掲載のお願いをした。
9月初旬	<ul style="list-style-type: none"> ・ オータムプロジェクト始動 活動の主体が生徒ではなく教員であることに気が付く。方向転換を図るために生徒による実行委員会を設立。 ・ 実行委員による会議(昼食時) 何のために活動を行うのか、自分達はどのように成長したいかを、オータムプロジェクトの柱に沿って考え直し、3年間の総合の柱とした。下記①～③。



図1 おもちゃ製作の様子

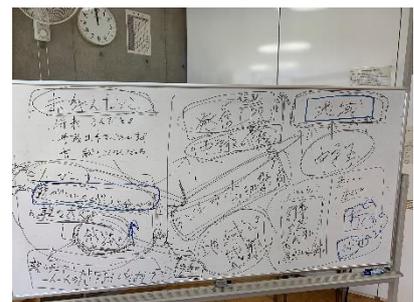


図2 実行委員話合い黒板

- ①地域の核になる
- ②感謝を伝える
- ③安居の地域のことを発信する

9月中旬

- ・赤ちゃんだっこの活動目標をクラスで話し合った。

実行委員会を中心として、赤ちゃんだっこの目標と今年1年の年間目標を話し合った。1年間の総合の目標は、「コミュニケーション」に決まった。また、赤ちゃんだっこの活動目標は意見がまとまらなかったため、実行委員会にゆだねられた。

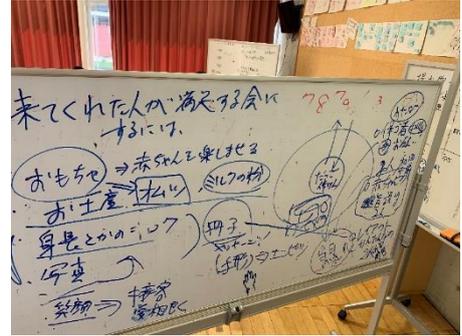


図3 実行委員会中心の話し合い

- ・実行委員会（昼食時）
会議で本活動目標を決定した。

- ①自分達の生き立ちを知り、親に感謝の手紙を書く
- ②赤ちゃんとのかかわり方を勉強したい。
- ③当日はコミュニケーション力を高めるためにも「おもてなし」をしっかりとしたい。

運営については生徒が。赤ちゃんについての学習面は教員が押さえることを実行委員会と取り決めた。

9月下旬

- ・赤ちゃんについての理解

福井工業大学附属福井高等学校の先生から赤ちゃんについて学んだ。妊婦体験・抱っこ練習などを実施した。赤ちゃんとの接し方などを専門的な視点で教えてもらうことができた。また、外部の方とのコミュニケーションをとることが苦手だと感じていた生徒が自分から話しかけにいく姿も見られ、外部にお願いする意義も感じられた。



図4 講師授業様子

- ・命の重みを考える（道徳と保健体育の授業）

実行委員より母親からの手紙をサプライズで渡され、それを読んだ。また、母子手帳の記録やメッセージを通して、家族からの愛情を知り、そのときの感謝の気持ちを家族に手紙で伝えた。「なかなか親に感謝の言葉を伝えることはないのいい時間だった」「親がこんなにも自分のことを考えてくれていると知らなかった」などの感想が得られ、活動目標①は十分に達成され、有意義な時間となった。

- ・おもてなし準備（環境整備・当日の運営方法の提案）

当日の運営方法について実行委員会が提案し共有した。また、来てくださる保護者の方に安居中学校の赤ちゃんだっこに参加して良かったと思ってもらえるようにはどうすればいいか考え、「おもてなし」を合い言葉に会場作りを行った。

<p>10月1日</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・赤ちゃんだっこ本番 <p>当日14組の赤ちゃんとお親御さんをお迎えし、赤ちゃんとお遊んだり、ミルクや離乳食をあげる体験を行った。親御さんを退屈にしないよう「コミュニケーション」を意識した活動を一人一人が考え行動することができた。お母さんとの対話を通し、親の思いを知り、子育ての大変さを学ぶことができた。「赤ちゃんを触るのは初めてで、命の尊さを感じる事ができた」「コミュニケーションをとるのは苦手だが、積極的に話しかけることができた」などの感想をもつことができていた。また、親御さんからも「参加させてもらえて良かった。いくつかの学校の赤ちゃんだっこに参加させてもらったが安居中学校が一番良かった」「生徒のみなさんがたくさん話をしてくれて、とても意識して活動しているんだなと感じた」などの感想をいただくことができた。</p>	
<p>10月中旬</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・お礼状作成・発送 ・振り返り（目的に合っていたか、どんな力を得られたか） <p>今回の活動全体を振り返り活動のテーマに合っていたか精査を行った。生徒からは「日頃感じる事の出来ない親への感謝を感じることができていい活動だった」「コミュニケーションをしっかりと意識して活動に取り組むことができた」などの意見がでる反面、「地域に根ざした活動ではなかった」「生徒主体で行うにはもっと計画的に長い時間をかけて行わねば」などの核心を突く意見も得られた。</p>	<p>図4 体験当日</p>
<p>11月中旬</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・活動内容と今後の課題をポスターでまとめて発表 <p>小学校との接続の意味も含め小学6年生を招いてポスター発表を行った。小学生の児童は中学校の学習の雰囲気を感じることができ、生徒も聞き手を意識した発表を練習する場にすることができた。また、11月23日の公開研究会では、一般の参観者に発表を聴いてもらえた。外に発信する意識を持ち、いつもとは違った空気感で発表することができた。生徒も「いつもと違った緊張感でやれた。たくさんアドバイスをいただけたので次の活動に生かしたい」「たくさんの人と話すことができて新しい価値観を知ることができた」などの感想がでていた。</p>	 <p>図5 公開研究会の様子</p>

4 成果と課題

今回の活動では、活動の主体を教員から生徒に移した時期が遅かった。しかし、途中からでも私たち教員が「生徒が主役」という意識を持ち、活動内容を見直したことで、生徒達自身も自分達で考えて活動することができていたのだと考える。今回のプロジェクトにご参加いただいた親御さんには十分な満足をしてもらえた。しかし、「地域色が薄かったこと」「生徒主体の活動を最初からできなかったこと」が反省としてあげられる。地元の保育園に協力を仰いだり、地元の方に講師として参加してもらおうなどして、もっと地域に根ざした活動にすることができると感じた。

(文責 川端 康誉)